

筒井一伸編：『田園回帰がひらく新しい都市農山村関係』

ナカニシヤ出版，2021年，229p，3,630円（税込）.

澤 端 智 良*

本書の書き出し（はしがき）は，編者による「『移住』の実態から農山村の変容を明らかにし，都市と農山村の新しい関係を展望しよう」という一文から始まる。編者の筒井は，農政学者の小田切らとともにいわゆる「農村たみ論」に対しいち早く反応し，農山村が有する可能性を信じてそのポテンシャルを最大限に引き出すための提言・発信を継続的に行っている研究者の一人である（小田切・筒井 2016；小田切・平井・図司・筒井2019など）。

本書は編者とそのような思いを共有する多彩な顔ぶれの執筆陣たちが，「田園回帰」の潮流の源泉を探り，都市と農山村の新たな関係からこれからの地域づくりのありかたを模索することを目指して進めてきた共同研究の成果であり，全10章で構成された力作である。

まず，序章と第1章（いずれも，筒井）では，農山村政策のこれまでの流れと関連させて，「田園回帰」が社会的あるいは学術的に着目されるに至った背景と概念整理が行われている。本書でキーワードとなる「田園回帰」について，「人口論的田園回帰」・「都市農山村関係論的田園回帰」・「地域づくり論的田園回帰」の関係性が図解され（p23），これらすべてを含む概念として広義の「田園回帰」があるとする。「田園回帰」をより大局的な視点から捉えるうえで，さらには以降の各章で展開される議論の内容を理解するうえでも押さえておくべき重要な論点が整理されている。いわば，「田園回帰」を切り口に都市と農山村の新しい関係を捉え直してみたいと考える読者に対し，その準備を支援する役割を果たしている。

第2章及び第3章（いずれも，山神）では，人口変化の側面から農山村の実態と予想される将来の姿を描き出すことで，「田園回帰」の現状とこれからのについて検討している。

第2章では，地域人口の変動を一連の空間的プロセスととらえ，三重県を事例に1960年と2015年の比較分析を行い，人口減少が大きい地域では生産年齢人口の継続的流出と定着した人々の加齢があいまって高齢化が著しく進展したことを明らかにしている。事例として提示された，旧三杉村および旧紀和町の人口ピラミッドの変化を示すグラフ（p52，p54）は，視覚的にも大きなインパクトを与える。

続く第3章では，和歌山県を事例に旧美里町および県下旧市町村の将来人口の推計を試みている。複数のシナリオを設定し比較検討した結果から，「出生率の上昇よりも地元定着者や移住者を増やす方が，人口減少を小さなものとどめる効果が高い」との見解が示される。そのうえで，高齢化の著しい地域において人口減少は不可避であり長期的な対策が求められるが，その際に様々なシナリオに基づく将来人口推計を議論の基盤に据えるこ

* 茨城キリスト教大学経営学部 准教授

とが必要であるとの指摘は重要である。ここでの分析はあくまでも簡易な方法によるものではあるが、農山村が抱える人口動態的な現代的・将来的課題が浮き彫りにされている。

第4章(嵩・重見)では、地方移住をめぐる状況の変化を概観したうえで、移住支援におけるアクター間の連携の在り方について、三重県および鳥羽市の移住支援の実態をもとに検討が加えられている。まず、ふるさと回帰支援センターの諸データにより、2015年頃から20代・30代が牽引するかたちで移住相談件数の増加が顕著であることなどが示されるが、移住希望者あるいは移住者の増加に伴い、それを受け入れる地域側や、移住者と地域との間に入りマッチングを行う組織・団体等の体制整備が肝要であり、「地域づくり」あるいは「まちづくり」として移住・定住促進政策を位置づけることの重要性が述べられる。また、移住を支援する団体には「都市側中間支援団体」と「地域側中間支援団体」があるとし、移住希望者が移住先を決定するまでのプロセスを4つのパターンに分類しているが、「都市側」と「地域側」に位置するそれぞれの支援団体が深く連携を取りあえる体制づくりが鍵になるとしている。

第5章(佐久間)では、「すまい」「なりわい」「コミュニティ」という田園回帰の3つのハードルのうち主に「すまい」に着目し、「コミュニティ」との関係について述べている。より具体的には、「空き家」の利活用とその課題、および地域社会が担う役割とが合わせて検討されている。事例として和歌山県那智勝浦町色川地区が取りあげられ、当地区において長年にわたり取り組まれてきた移住者受け入れの仕組みと成果に関する分析を通じて、地域社会が担う4つの役割(1. 空き家・空き家所有者の把握, 2. 物件の現況把握と情報共有, 3. 空き家と移住希望者のマッチング, 4. 入居後の生活支援)を抽出している。色川地区の事例では、地域社会の人々が空き家の所有者と移住希望者との関係をつなぎ移住者を迎え入れることで「すまい」と「コミュニティ」の問題をセットで解決しており、学ぶべき点が多い。

第6章(筒井)は、上述の田園回帰の3つのハードルのうち「なりわい」を取りあげている。まず、先行研究等を整理しながら、「なりわい」を地域資源やコミュニティとの関係のなかで位置づけられるものとして捉え、したがって「なりわい」は移住者個人の問題ではなく、「地域の問題」として認識すべきものである、との視点が示される。そのうえで、「農山村の地域資源を活用して新たに『地域のなりわい』を創出するもの」としての「地域起業」と、単なる事業(狭義の経営資源)の後継ぎにとどまらず「地域との関わりとなりわいを引き継ぐもの」としての「継業」という形態があり、それらを地域側がどう支援すべきかについて検討がなされる。「地域起業」に対しては「促すきっかけ」、「軌道に乗せるためのサポート」、「日常の運営へのサポート」という必要な支援の流れがあり、移住起業者を「支える主体」どうしの連携(支援のバトンリレー)が不可欠となる。また「継業」へのサポートでは「継ぐ人」と「継がれる人」の並走期間(継業のバトンリレー)を設けることなどが求められるとする。このように、農山村における「なりわい」づくりにおいては、事業そのものへの支援に加え、地域住民や地域コミュニティとの関係性構築をいかに支援できるかがポイントとなる。

第7章(中川)では、農村空間の商品化とコモンズ論の議論などを参照しながら、都市と農山村の関係について検討している。コモンズ論を発展させたコモン化に関するこれま

での議論を振り返りながら、従来のコモン化に関する議論はアーバニズムに即して行われてきた傾向にあるが、人々は都市的な社会のみにコモンを見ているのではないと指摘する。そして、むしろ農村生活に対する志向性の中にコモンを希求する新しい社会形成への手が見出し、それが「田園回帰」なのではないかとの見解を示す。農村におけるコモン化の実践例として、棚田オーナー制度とスコットランドのコミュニティ・ランドオーナーシップを取りあげ、従来の資本主義の文脈のなかで進展してきた「都市化」とは異なる新しい社会変化の発現を見出している。

第8章（立見）では、「もう一つの経済」として近年着目されつつある「（社会）連帯経済」の視点を導入し、「田園回帰」との接点を探っている。まず、「連帯経済」が登場した背景が資本主義の変化という文脈から説明され、フランスにおける実践や政策的動向（社会連帯経済法の成立）、理論的展開等に触れながら、互酬制や民主的ガバナンス、コモン／ピャンコマン（共通善・共通財）といった重要概念が解説される。立見によれば、連帯経済は現代資本主義と通ずる特徴を有しながらも、相互扶助的な連帯や共通善（＝ピャン・コマン）を重視し、民主的ガバナンスに基づくコモンの維持拡大を目指すという点で、現代資本主義とは対照的な面を持つという。そして、コモンの維持・生産という点に連帯経済と「田園回帰」との類似性を見出している。その一方で、日本の農村社会のような伝統的なコミュニティではコモンを所属メンバー間の共通利益と同一視しがちであるが、連帯経済におけるコモンの強調は伝統社会への回帰を意味するわけではなく、むしろそれを乗り越えるような新たな社会の展望と結び付けられなくてはならないとの主張がなされる。

第9章（筒井・立見・佐久間）は本書全体のまとめにあたる章であるが、ネオ内発的発展論の視点を導入し、今日の田園回帰現象をどのように理解できるか等について検討している。「田園回帰」はあくまでも「数（移住者数）」のみで語られるべきものではなく、移住者たちやあるいは移住に至らずとも地域と「縁」を持とうとする人々の行為や存在が、その地域に及ぼす影響に着目すべきであるということが改めて強調される。これまでの各章でも繰り返して述べられてきたように、地域の外部との関係性に目を向けることが重要であるというのが編者らの一貫した立場であるが、その文脈の中で、（地域の内外を問わず）コモンへ自由にアクセスできる権利と民主的なガバナンスの確立を目指す「連帯経済」の考え方や、地域内外の関係を結びつける媒介の役割を果たす「地域資源としての『空き家』」にネオ内発的な農山村発展の萌芽と課題を読み取っている。

以上が本書の主な内容である。若者を中心とする農山村への関心の高まりが確かにみられつつある流れの中で、「田園回帰」をめぐる実態を知り、それをどう理解すべきかをいまこのタイミングで考えることが我々にとって重要であるとするならば、本書からは多くの示唆が得られるであろう。たとえば、第5章および第6章では、移住に関わる「住居（空き家）」や「仕事」の問題を取りあげているが、一般的に多用されるそれらとは異なる意味合いを含ませた「すまい」や「なりわい」という捉え方を提示している。あくまでも地域資源との関わりのなかで（あるいは、地域資源そのものとして）住居や仕事を捉えなおすという視点は、農山村の地域づくりの実践を考えるうえで大いに参考となるであろう。また、第4章で示される中間支援団体の関わり方に関する分類なども、実践の場で生じる

様々な問題を整理する際に役立ちそうである。

一方で、序章や第1章での「田園回帰」をめぐる理論的な整理や、第7章の「農村空間の商品化」・「コモンズ論」、第8章での「(社会) 連帯経済」、そして第9章でふれられる「ネオ内発的発展論」など様々な理論的枠組みも導入し、本書が示そうとした「田園回帰がひらく新しい都市農山村関係」について現場と理論の双方から多角的に検討されている。

少し気になった点としては、複数の章にまたがって類似した説明が繰り返されているところもあり、やや冗長に感じる部分もあった。また、理論と現場(事例など)の占めるウェイトが章ごとで大きく異なっているように感じられるため、一冊の本としてはややまとまりに欠ける印象を受けるが、「理論編」・「事例編」に分けるなどありきたりな構成にしてしまうと多彩な執筆陣によって編まれた本書の良さが損なわれるような気もするため、これはなかなか難しい問題である。評者の読解力の問題かもしれないが、他の読者の評価も聞いてみたいところである。

ただ、いずれにしてもそれらが本書全体の価値を損なうようなことはなく、各執筆者がそれぞれのテーマを「田園回帰」あるいは「移住」という現象と丁寧に結びつけようと工夫をした現れとも捉えられる。その点でも、終章にあたる第9章を本書の執筆にあたった3名が共同で執筆し、本書全体の主張をあらためて俯瞰的にまとめ直してくれている点は、読者にとって大変ありがたい。

さて、あえてここまで明言を避けてきたが、評者の現在の主な研究領域はマーケティングである。元々の出自は地理学なのだが、学部・修士での主な研究フィールドは都市部であった。つまり、つつみ隠さずに申し上げれば本書が取り扱っているテーマは評者の「専門ど真ん中ではない」ということだ。本書を手にとった理由は、編者および執筆メンバーたちとの「縁」によるところが大きい。このたび書評を書くにあたり本書を何度も読み返す中で、思いがけず評者の関心領域に対するインプリケーションもいくつか得ることができたと感じている。最後にその点にも少し触れておきたい。

近年マーケティングの分野でも「地域」に対する関心が高まっている。例えば、日本マーケティング学会のリサーチプロジェクトでも「地域」や「プレイス」を冠した研究会がいくつか立ち上げられ、研究成果のアウトプットもみられる(宮副 2014; 若林・徳山・長尾 2018 など)。

紙幅の関係で詳細は割愛するが、「地域資源を活用した企画・編集」や「地域への意味づけ」などはこれらのマーケティング研究が得意とするところだ。しかしながら、市場志向・顧客起点を発想のベースとするマーケティングの立場からは、どうしても地域の外からどう見られるか(どう見せるか)に重きを置いてしまいがちである。もちろん、地域内アクターをどう束ねるかや、地域アイデンティティをどう作り上げるかといった「地域内」への活動にも目は向けられているが、本書の第7章(中川)や第8章(立見)で議論されている「コモン」や「ピヤン・コマン」という発想が果たしてどのくらい意識されているだろうか。つまり、マーケティングは本書で中川や立見らがいうところの「現代資本主義」の発想、あるいは「都市的」な発想から根本的には抜けきれておらず、したがって「もう一つの経済」との間で起こる軋轢や緊張関係のようなものをほとんど意識できていないのではないかとさえ見える。本書での議論を通じ、そのことに改めて気づかされると同時に、「地

域マーケティング」や「プレイス・ブランド」研究を新たに展開させるためのヒントが示されているようにも感じた次第である。

本書の締めくくりで編者は、『『農山村（という空間）で』の研究を志向するばかりではなく、『農山村（という空間）を』研究することが、地理学の立場からは重要である』と述べている。コミュニティとの協働や学際的研究／「超」学際的研究を促すものだ。これは、直接的には地理学へ向けて発せられたものであろうが、いまは他分野に身を置く評者の胸にも鋭く深く突き刺さるメッセージである。

参考文献

- 小田切徳美・筒井一伸 編著（2016）『田園回帰の過去・現在・未来 一移住者と創る新しい農山村一』農山漁村文化協会
小田切徳美・平井太郎・図司直也・筒井一伸 著（2019）『プロセス重視の地方創生：農山村からの展望』筑波書房
宮副謙司（2014）『地域活性化マーケティングー地域価値を創る・高める方法論』同友館
若林宏保・徳山美津恵・長尾雅信（2018）『プレイス・ブランディングー地域から“場所”のブランディングへ』有斐閣

Edited by Kazunobu Tsutsui :
A New Frontier of Urban-Rural Relationships in Japan
Tomoyoshi Sawabata